RAN TERASHIMA

寺島蘭

てらしま　らん

1997年1月9日、白糠町生まれ。北海道教育大学釧路校美術研究室卒業後、教員として釧路共栄中学校で4年間、美術科と家庭科を担当。昨年４月から白糠学園勤務となり家庭科を主に担当している。
実家は谷本商店。

「何かを作る楽しさや、表現する喜びを伝えたい」

毎年12月になると釧路市内にある喫茶店「珈路詩（かろし）」には、絵画作品約70点がずらりと展示される。この作品を手掛けているのは白糠学園教諭の寺島蘭さんだ。寺島さんが珈路詩で個展を開いたのは昨年で７回目となった。寺島さんの作品は「生き物」がテーマ。寺島さんが描く魚や動物には、独特な模様が施されており、どの作品にも生命を感じさせる不思議な力がある。

「模様に意味はなくて、ただ思うがままにペンを走らせているだけなんです。それが花っぽく見えたりすることもあれば、ただ丸や三角の羅列になることもあります」

寺島さんが絵を描き始めたのは、祖父の影響が大きいという。

「祖父は酒屋をやっていたんですけど、絵を描いたり、木彫りをしたりするのが趣味で、独学でいろいろな作品を作っていました。そんな姿を見て育ってきたので、子どものころからチラシの裏に絵を描いたり、割り箸を使って何かを作ったり、身近にあるものを使って、見よう見まねでモノづくりをしていました」

寺島さんは現在、アクリル絵の具を使った絵画のほか、消しゴムはんこやペン先がミリ単位のミリペンを使ったペン画、クラフト工作、粘土造形など、多くの作品を作っている。どの作品も芸術的で、その才能は祖父譲りだ。昨年末には、ウレシパチセで寺島さんの「消しゴムはんこ教室」が開かれ、人気を呼んだ。

「私の絵には細かな模様が入っているので、この模様を消しゴムはんこにしたらどうなるのかなと思ってやってみたら、自分らしい作品になりました。消しゴムを彫る作業は楽しく、ジブリのキャラクターや自分の好きなものを日々消しゴムはんこにしています(笑)」

好きなことを軸に生活ができたらそれが一番と話す寺島さん。白糠の町も大好きで、白糠で暮らせることをとても喜んでいる。

「昨年４月から白糠学園での勤務となり、毎日が充実しています。生徒たちも元気で素直な子が多く、かわいくて仕方がない。私は学校で家庭科と美術を教えていますが、何かを作る楽しさだとか、表現する喜びを少しでも生徒たちに伝えられたら良いなと思っています。私の祖母もモノづくりに肯定的な人で、失敗しても『上手だね』と褒めてくれたり、子どもの頃に描いた絵を今でも家の壁に貼ってくれています。私も生徒の力を伸ばすことができる、そんなきっかけをつくれる先生になりたいと思っています」

寺島さんにとってのモノづくりとは、何なのだろうか。

「モノづくりは、自分がおばあちゃんになってもずっと続けていると思います。何かを作るということが私の日常を彩る一番のものですから」

昨年12月に珈路詩で行われた個展の様子。珈路詩に入って右側の壁は、新作で埋め尽くされました。